



# 英文学会通信

## 第123号

— 日本大学英文学会 —



発行：日本大学英文学会

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部英文学科研究室内

Tel. : 03-5317-9709

E-mail : esanu02@gmail.com

### 《ご挨拶》

会長挨拶	日本大学英文学会会長	一條 祐哉	2
前会長退任挨拶	日本大学英文学会前会長	吉良 文孝	3
令和7年度を迎えて	日本大学文理学部英文学科主任	塚本 聡	4

### 《特集》英文学会に所属する先生方へのインタビュー

日本大学文理学部教授 リチャード・キャラカー	日本大学文理学部英文学科4年	秋元 優志	5
	日本大学文理学部英文学科卒業生	高橋 尚吾	
日本大学文理学部特任教授 高橋 利明	日本大学文理学部英文学科4年	横田 涼	6

### 《エッセイ》

10年経って…	日本大学第三中学校・高等学校教諭	明石 啓	9
英語に救われた人生	東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校教諭	中野 雅也	9
Ireland. I have much, much to learn.	日本大学通信教育部准教授	猪野 恵也	10
令和6年度 第6回ダブリンシティ大学 (アイルランド) 夏期語学研修の引率を終えて	日本大学法学部専任講師	佐藤 健児	11

### 《検定試験奨学制度》

自分のペース、自分の学習方法を見つけることから	日本大学文理学部英文学科卒業生	瀬治山凛音	12
自分と向き合う	日本大学文理学部英文学科卒業生	行方 純果	13

### 《海外留学体験記》

異国の地を知る	日本大学文理学部英文学科3年	白杵 春奈	14
---------	----------------	-------	----

### 《新刊書案内》

『アジア系アメリカを知るための53章』(明石書店、2024年)	日本大学文理学部教授	牧野 理英	14
英米文化学会編『アジア・パシフィックの劇場文化』(朝日出版社、2024年)	日本大学文理学部教授	閑田 朋子	15

### 《研究室だより》

2024年度(令和6年度)行事			16
2025年度(令和7年度)行事			18
着任のご挨拶	日本大学文理学部准教授	高橋 洋平	18

### 《計報》

			19
--	--	--	----

### 《事務局だより》

月例会報告			19
2025・2026年度運営委員			20
日本大学英文学会2023年度決算額			21
お知らせ			21

## 《ご挨拶》

### 会長挨拶

日本大学英文学会会長 一條 祐哉

このたび、2025～2026年度の会長を務めることとなりました。前会長から「若い世代の方に学会を盛り上げてほしい」と声をかけていただいた際、「まだ若輩者ですから、会長にはふさわしくないのでは…」と申し上げました。すると「いや、一條さんもそれなりに年をとっているよ」とおっしゃられるので、若いのか若くないのかどちらだろうと思いましたが、最終的には「大丈夫。ケネディだって、40代でアメリカの大統領をやったんだから」というお言葉に背中を押されて、会長をやらせていただくことになりました。

まず、研究会員、同窓会員、学生会員の皆様には、常日頃から学会運営にご協力いただき、誠にありがとうございます。会員の皆様にご満足いただけるような学会運営をして参りますので、引き続きご厚情を賜りたく、お願い申し上げます。また、昨年度まで運営委員・常任委員をお務めいただいた先生方に、感謝申し上げます。特に保坂道雄先生（文理学部）が委員長を務められた編集委員会のおかげで、以前よりもボリュームのある『英文学論叢』を刊行することができました。また私自身、会計を担当しておりましたが、大きな問題なく会計業務ができたのは、会計監査の加藤寛典先生（日本大学鶴ヶ丘高校）が、ご自身でダブルチェック用のエクセルファイルを作成し、きめ細かく帳簿や決算報告書を確認してくださったおかげです。

今期の運営委員・常任委員の一覧は別ページに掲載しております。引き続きご担当いただく先生、また新たにご担当いただくことになった先生、なにとぞよろしく願います。このうち副会長として松山博樹先生（法学部）、会計として飯田啓治朗先生（文理学部）、会計監査として今滝暢子先生（生産工学部）、編集委員長として前島洋平先生（文理学部）にご担当いただくこととなりました。

さて、この任期中に取り組むべきこととして2つあります。1つは会員数の減少を食い止めるために学会活動を盛り上げること。もう1つは英文学科創設100周年記念企画を成功させることです。研究会員の減少は、さまざまな要因があると思いますが、大学院生の数が減少したこともその1つでしょう。大学院生が少なくなってきたのは、若年層の人口の減少や経済的な問題があるかもしれません。それでも、どうにかして1人でも、2人でも大学院生の数を増やす努力をしたいと思います。そのために、学部生に本学会の

活動にどんどん参加してもらって研究に興味を持ち、大学院を志してもらえるような道筋を作りたいと思います。また大学院を目指さない学部生にも、学会活動に参加することで、研究の面白さを感じてもらい、専門の授業やゼミ、卒業論文などに役に立つような取り組みをしたいと考えています。その第一歩として、本学会のInstagramを4月に開設し、学会の情報を学生に案内できるようにしました。学会のイベントや刊物などの情報を随時発信いたしますので、研究会員や同窓会員の方もフォローいただければ幸いです。

また、2026年に英文学科は創設100周年を迎えます。昨年度設立した100周年記念企画準備委員会を中心に、英文学科と本学会の共催の形で、100周年記念企画を検討しています。具体的には、100周年記念大会の開催と100周年記念論文集の発行を計画しております。記念大会は2026年度に開催する予定です。開催時期や会場、内容が決定次第、お知らせいたします。また記念論文集については『英文学論叢』第74巻を100周年記念号として刊行いたします。研究会員の方にすでに案内している通り、なるべく多くの先生からご投稿いただきたく、その準備期間を長くするため、今回は投稿締切日を9月末日ではなく2026年1月といたします。その後、査読や編集作業を経て、2026年度に刊行予定です。（したがって2025年度は『英文学論叢』を発行いたしませんので、ご了承いただきますようお願い申し上げます。）多くの会員の方にご応募いただき、100周年にふさわしい立派な論文集を作成したいと存じます。ぜひお知り合いの方にもお声がけいただき、100周年記念大会への参加、また、100周年記念論文集の投稿をよろしく願います。

同窓会員の方へのご案内として、12月の本学会の学術研究発表会・総会のあとに、懇親会を開催します。ご友人や先輩・後輩の方をお誘い合わせの上、お料理を楽しみながら、交流を深めていただければと存じます。また、文理学部のイベントとして、11月1日（土）に文理学部・校友会主催のホームカミングデーが開催されます。同日には桜麗祭（学部祭）も開催しておりますので、ぜひ遊びにいらしてください。

吉永小百合は、映画出演123作目となる『こんにちは、母さん』（2023年公開）で引退を考えていたそうです。ただ、公開初日の舞台挨拶で「1、2、3！で外に飛び出すような数字なので、もう少しやってみようと思います」と決意を新たにしました。この「英文学会通信」も第123号となりました。本学会も新たな時代に飛び出す気持ちで、100周年記念企画を成功させ、また今まで以上に会員の皆様にご満足いただけるように、そして次の世代に引き継いでいけるように、学会を盛り上げて参りたいと思います。会員の皆様からのご意見、アイデアなどがございましたら、遠慮なくお申し出いただければ幸いです。2年間、何卒よろしく願います。

## 前会長退任挨拶

こころの中には、いつも、いつも英文学科、英文学会がありました。そして今も。これからもずっと、ずっと心の中に。

日本大学英文学会前会長 吉良 文孝

私はこの3月末日をもって定年退職し、それに伴い本英文学会の会長も退任することとなりました。退任に際し、学会員の皆様にと一言ご挨拶申し上げます。

ころざし半ばにして夭折した故寺崎隆行会長のあとを受けての3年弱の会長任期、そして本年3月末日までの1期2年を合わせた5年弱の間、諸事関係した皆様には本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

思い返せば、本学会には「研究会員」として入会以来、いろいろなことがありました。研究会員からの年月と英文学科助手からの勤続35年を足しますと、本学会とは40年以上にわたり研究・親睦活動をともにしてきました。ごく簡単にはありませんが、これまでの思い出と、今後の学会への思いを書き綴ります。

私が初めて月例会で発表したのが 本学大学院の後期課程2年の時でした。当時は、月例会はもちろんですが、とくに、年次大会で研究発表される先輩方や、英文学科・他学部の先生方の研究発表を前にして、「発表も凄いいし、質問も鋭い。その質問に対する受け答えの能力も昨日今日身についたものではないし…」。ただただ「すごい！」という驚きと畏敬の念で発表を拝聴していました。そのころは、機関誌『英文学論叢』への投稿はもちろんですが、英文学科の先生方による例会発表も多かったように思います。

それから40余年にわたる月日が流れました。お世話になった英文学科の先生は数知れませんが、私の場合は、何と言っても、江川泰一郎先生との邂逅です。江川先生から受けた学恩がなければ今の私の研究者人生はなかったと思います。それもこれも、英文学科、英文学会とのご縁あってのことです。「江川泰一郎著 吉良文孝改訂」の2行を表紙にした英文法書の出版、それが私の夢であり、私の残された時間のライフワークです（言うは易し、ですが…）。

昨年末の年次大会では、「最終講義」の場を設けていただき、随分多くの方が来場してくださいました。この場をお借りし御礼申し上げます。また、大学院での最終授業のあとにも心温まる（と言いますか、感激で涙するような）ひと時をつくっていただきました。これも生涯忘れられない貴重な時間でした。そういろいろな会を見聞きする家族からは、「研究業績は兎も角として、人間関係だけはつくったことはよくわかった」と言われるほどの時間をみなさんと過ごすことができました。これも英文学科、英文学会あって

のことです。感謝、感謝です。

私は、卒業アルバム（卒業者名簿）の「ひとことメッセージ欄」には、ここ数十年、「よき友は、生涯の宝。」と書いています。英文学科、英文学会での出会いは、まさに、私にとっての宝物です。

さて、次の10年、20年と、わが英文学会は続いていきます。次期会長には、一條祐哉先生にバトンを引き継いでいただくこととなりました。一條先生は日本大学英文学会を更なる高みへと導いてくださること間違いなしです。本「学会通信」（第119号）でも言及しましたが、来年2026年には英文学科（学会）創設100周年を迎えることとなります。区切りのよい100周年ということですから、英文学科主任、英文学会会長を中心に学科をあげての盛大な記念行事が開催されることでしょう。大いに期待しています。

最後となりますが、至らぬ会長を縁の下から支えてくださった事務局の先生方（助手さん）、事務室スタッフの皆さんにはこの場を借りて感謝申し上げます。また、運営委員会、常任委員会の諸先生、そして、言うまでもなく、これまで長きにわたり本学会を見守りご支援くださっている会員の皆様には、重ねて、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。これまでと同様、わが日本大学英文学会を盛り上げ支えていってくださることを願っております。それが叶えば、それはもう私の望外の喜びです。



## 令和7年度を迎えて

日本大学文理学部英文学科主任 塚本 聡

2025年度（令和7年度）、文理学部英文学科には1年生139名、日本大学大学院文学研究科英文学専攻前期課程院生3名、後期課程院生1名が入学しました。現在本学科では定員割れは生じていませんが、少子化の影響をひしひしと感じています。昨年は大学院生の入学者が多く、近年には珍しい状況であると感じましたが、本年度入学者はやや少なく、売り手市場の就職状況が反映されたのでしょうか。

英文学科の教職員の異動についてご報告いたします。昨年度の年次大会において最終講義が行われましたが、長年英語学を研究されてきた吉良文孝先生が昨年度末に定年を迎えました。その後任として理論言語学を研究分野とする高橋洋平先生をお迎えしました。同じ英語学分野ですが異なる研究手法であるため、新たな研究の視点が提供され、教育に生かされることが期待されます。特任教授を含め、教員16名、任期制職員及び派遣職員3名総勢19名にて英文学科が運営されています。訃報欄にある通り、本学科元教授ウィリアム・D・バターソン先生が2025年3月10日にご逝去されました。

日本大学文理学部は、本年度カリキュラム改定を行いました。昨年度に少し言及しましたが副専攻制度が導入されます。今までは学科専門科目を受講する学生はもっぱら英文学科の学生でしたが、これからは他の分野を専攻する学生の受講が予測されます。文理学部は伝統的な学科から成り立っていますが、今後はより学際的な教育が求められ、学生のニーズに合った教育機会を提供していく必要性がより高まります。

学際的と言えば、工学分野が発生源の生成AIなどの仕組みが社会に広く浸透しきています。最近では検索エンジンで検索すると「AIによる概要」などの解説文が最初に掲示されるくらいです。企業や自治体でも導入が進み、AIの使用はあらゆる場で一般的になりつつあります。授業で課題を出しても本人が調べたのか、AIの回答を写し取ったのか、判別しづらい事態となってくるでしょう。授業運営も変革が必要になると予想されます。

AIの顕著な一例は言語使用ですが、言語学分野のチョムスキーに代表される理論では、人間には生得的に言語に関わる能力が備わっていることが前提とされています。それゆえ、人類のみが言語を使用することができるという説明につながります。一方AIでは、大量のデータを与えたことで帰納的に言語の規則が構築されているということになります。この場合、

生得的な言語能力は前提とされません。すなわち両者は相反する形で言語を捉えていることとなります。どちらが言語の本質に迫っているのでしょうか。

言語学と情報系学問という異なる分野の発展ですので、優劣を付けることは難しいかもしれません。しかし、現状見るAIの振る舞いを考慮するならば、言語学の前提が覆る可能性はありうるようにも思います。この例えが良いかどうかわかりませんが、ベルリンの壁崩壊にも似た大きなパラダイムシフトが言語学に生じるかもしれません。そのような機会は通常ありませんので、もし生じるならば我々は貴重な機会に立ち会うこととなるでしょう。

AIの進化は止められないでしょうから、ユヴァル・ノア・ハラリの*Homo Deus*に述べられる“Useless class（無用者階級）”にならないために、人間の本質を見失うことの無いよう気を付けなければならない時代が到来したことを感じ始めています。





英文学会に所属する先生方への  
インタビュー

リチャード・キャラカー先生(日本大学文理学部教授)

インタビュー：英文学科 4 年 秋元 優志  
英文学科卒業生 高橋 尚吾

R…Richard Caraker

S…Shogo Takahashi

Y…Yushi Akimoto

S: Today, I want to ask some questions about English study methods and your experience.

R: OK. Thank you for coming to my office today.

S: My first question is about your Advanced Communication class. I really enjoyed your class, and I was able to improve my English communication skill through oral presentations. How did you come up with such a communicative class?

R: I've been teaching oral presentations for 32 years. My method of oral presentation has evolved over the years until I arrived at the current teaching method. I think what is important to remember is that such skills are not limited to English or any language. It is a fact of life that students have to use such skills in their classes, for a party speech, or for a welcome speech of their club activity. Also, students who leave university have to continue to give oral presentations at the company, weddings, funerals and in many other aspects of life. So, it is important for students to learn about oral presentation skills. In addition, companies want their employees to learn global oral presentation skills because they think it is important. Actually, I'm asked by various companies in Tokyo to teach their employees the same skills that I teach in my Advanced Communication class, and I do consulting at Dentsu, Mitsui-bussan and Addidas. Therefore, I think somebody needs to teach these skills in university, so I decided to teach students these skills. Again, oral presentation skills are not limited to any language. So, you can use these skills in Japanese too. This is the point I have in mind when I design my class. … (He takes a book from the bookshelf.) What I teach in my class come from the book "Made to stick" . I teach students "SUCCES" based on this book.

SUCCES…stands for Simple, Unexpected, Concrete, Credible, Emotional, Story.

Y: Thank you. I'd like to ask you another question. Why

did you choose to become a teacher in Japan?

R: Actually, at first, I wanted to go to a developing country such as Myanmar or Indonesia because I wanted to experience teaching in a country which is very different from the United States. First, I taught in Thailand for one year. Then I married my Japanese girlfriend. I decided to go to Japan with her.

Y: Do you like Japan?

R: No. I *love* Japan! Especially, Yamanashi is my favorite place. Yamanashi is a good place to escape the heat in summertime. I recommend Motosu Lake and Shosenkyo Gorge because at those places you can swim in the summer. Also, there are many mountains, so you can go hiking, snowboarding, and play tennis! And don't forget, Yamanashi has many delicious foods and drinks. I especially like Yamanashi's fruits such as pears, cherries, peaches, grapes, and so on. Oh, and the craft beer in Yamanashi is great!

Y: These days, the qualifications such as Eiken and TOEIC have become important in Japan. What do you think is important when studying for these qualifications?

R: I think you are not doing your best if you study for these qualifications as tasks. That goes for vocabulary, grammar, and listening.

What I want to say is the way for you to improve your qualification is not to STUDY but to USE English. For example, get a part-time job where you use English or read an English magazine about your favorite sport, such as soccer. You can improve your English skills by using the language you inputted through these experiences while having fun. For example, you can talk to foreign customers at your part-time job, or you can listen to your favorite English music.

S, Y: Thank you, I'm glad to hear your story.



高橋 利明先生（日本大学文理学部特任教授）

インタビュー：英文学科4年 横田 涼

横田：質問についてなのですが、主に英語の勉強法についてです。高橋先生自身が効果を実感したり、楽しくできる勉強法などを教えていただくとありがたいです。

高橋：難しいね。勉強って楽しくないからね。

横田：（笑笑笑笑）

高橋：楽しくってというのはなかなかできなくて、僕自身の経験からすると、そうだね。大学に入ってから話でいいかな？

横田：はい。

高橋：僕は大学に入ってから家庭教師をしていたけど、大学院での経験を話すね。英語がとても不得意な子だったけど、大学受験で慶應大学を目指していたね。そのためにしっかり準備しなくてはいけないと考え、『新々英文解釈研究』（研究社）という古い本を教材として使った。これは英語の参考書の古典と言われていて、山崎貞という人が書いた本なんだ。僕は高校の時からこの本のことは知っていたけど、自分では使わなかったので教えるためには自分も読まないといけない。基本は英文読解の解釈力をつけるものなんだけど、週2日のペースでその場で訳してもらったものを確認しながらという使い方をした。難しい本だけど、厳選された英文を読みながら英文法の理解と知識が深まる。読解力と共に、文法力と、語彙力が身につく。一石三鳥くらいだよ。だから、一冊の本を、これはっていう本を徹底的に読み切る。これが1番大事だと思う。それがベースだから。英文読解力がないと、話すにしろ聞くにしろ、なにをやってもやっぱり身につかない。英語を読解する力をつけるために大事なことは、何でもいいけど、一応定評のある参考書などを一生懸命読むってことかな。その子は2年間面倒を見たけど、結局早稲田大学に入ったんだ。

たとえば、授業がない塾ってあるでしょ。武田塾とか。（笑）

横田：ありますね。（笑）

高橋：一冊参考書を与えて、きっちりやるというスタイル。このスタイルは大事だよ。予備校に行っただけでいいけど、それよりは、絶対にこれをやるというものを決めてトコトンやる。そうすると英語を読む力、語彙力、文法力、解釈力というベースを固めることができる。そういうものは大学に入ったら皆さん忘れがちになるよね。（笑）

横田：身に覚えがあります。（笑笑）

高橋：授業のテキストでもいいけど、テキストならテキスト、小説なら小説で、きっちりそれを読み切る。どうしても1年間では授業で全てを扱えなかったりするから、「自分は最後までこれを読み切る」と決めるとかね。そうすると、必然的に語彙力や文法力、文学であれば解釈力も身につくはず。英語を読む上での総合的な英語力の基礎を養成するためには、やはり先にあげた『新々英文解釈研究』は古典だけど大事な本だと思います。こういうものを徹底的にやるみたいなことですね。こういうものは本当は高校生の時にやるのが1番だと思いますが、大学生になってもそれは同じだから、これだって決めた一応定評のあるものを徹底して読むというのが、勉強法だと思います。あとは英語の4技能中のリスニング、スピーキングとライティングだけど、ネイティブの英語をたくさん聞くとか、できるだけ外国人に話しかけるとか、日記を英語でつけるとか、インターネットなんかも柔軟に使いながら自分の英語力を育てることかな。結局は自分の努力次第で4技能は伸びていくでしょう。それにしても4技能の1番の基本はやっぱり英文の読解力で、要するに文法力や単語力がないと読めないし、喋れない。その力をつけるためにも、一冊何かを決めてやるっていうのを実行したらいいと思う。それが勉強法かな。

横田：はい。

高橋：あとは、勉強ってというのはなかなか楽しくできないからね。やってるうちに楽しくなるってことじゃないのかな。楽しい勉強なんかないわけ。で、（笑）「あ、こういう意味か、こういうふうに解釈できるのか」とかっていう風にやりながら楽しさがわかるわけであって。

横田：先生はアメリカ文学の専攻ですよ。そのアメリカ文学の研究とか、勉強も、やってるうちに楽しいって感じですか？

高橋：それはそうだね。大学院に入った時に『緋文字』をやり始めて、その面白さ、ホーソーンの文体、表現、内容、特にヘスター・プリンという女性の周縁に追いやられながらも、強く生きていく姿に惹かれた。そういうところから僕の『緋文字』研究はスタートした。今は『白鯨』がメインになってるけど、アメリカ文学を代表する『緋文字』と『白鯨』というのはとても大事な作品だよ。『白鯨』の魅力は色んな意味で語り尽くせないところがあるけど、メルヴィルが、ホーソーンにこの『白鯨』を捧げるんだよね。『緋文字』が1850年出版で、翌年に『白鯨』が出版された。この『白鯨』の最初の頁には、この

本はホーソーンの天才に捧げると書いてあるんだよ。このふたりの文学を研究してきて、どこまでわかったかっていうのは中々難しいんだけど、自分なりに研究して理解を深めてきたよね。

横田：こういう研究も、やっているうちに楽しいという感覚ですか？

高橋：そうだね。楽しい時ばかりじゃなくて、苦しい時の方が多い。(笑)

要するに、苦しみながら一条の光じゃないけど、楽しい何かが見えてくるというか。

高橋：そもそも原書を読むのが大変だもんね。(笑)

横田：(笑笑)

高橋：読むのに必死だからね。(笑) 日本語じゃないから、これを読むっていうのはすごく時間がかかるし、なにがテーマなのかっていうのは自分で考え出さなければいけない。テーマを決めた後、今度は自分で本の中から分析をする、どこにどう書いてあるから、こうなのだっていう。だからあまり楽しくないよね。(笑)

読んでいて楽しい時ももちろんあるけど、論文を書かなくちゃいけないから、きついなって思う時もあるし、テーマが見つからないと中々書き始められないからね。そういう生む苦しみというか、論文を書く時の生み出す苦しみっていうのは、常にある。

横田：でもそれが、パッと出てきた時とか、これだ！って思った時は楽しいし、面白い、という感じですか？

高橋：そうだね。そうだと思う。

横田：そういうことのために、頑張るっていうことですか？

高橋：そうそう、そのためだけに。(笑) そのためだけっていうか、もう仕事だからね。

横田：そうですね。(笑)

高橋：原書を読んで、それについて何か論文を書くっていうのを、もう40年以上やってきたことになるね。でも、中にはいると思うよ。書くのが楽しくてしょうがないみたいな人。そういう優れて筆が立つ人もいるかもしれない。でも僕は凡人だから、やっぱり努力して、読んで、考えて、書いてっていうことが必要な。

横田：やっぱり感覚としては、普通のサラリーマンの人でも、仕事を楽しくやっている人みたいに、辛いことの方が多いけど、達成感とか、そういうご褒美のためにやっている感覚に近いですか？

高橋：そうだね。そうだと思うよ。サラリーマンだって、必死だと思うよ。売り上げだとか。売れて自分の仕事の評価されたら嬉しいだろうし。

横田：ちなみに、先生が学問の道に進もうと思ったきっかけって、どういうものなのですか。

高橋：きっかけは、文学が好きだったからかな。でも、本当は、卒論では英語学だったんだよ。

横田：そうなんですか！

高橋：卒論は、もともと文学が好きだから文学で書こうと思っていたんだけど、ある時に自信をなくして。やっぱり文学は難しすぎて僕には無理かなって思って、卒論は英語学にしたんだよ。でもやっぱり卒論は書いたけど、大学院に入ったとして、これは僕には面白くないのかもしれないと思って、もともとやろうと思ってた文学の道に戻ったんだよ。で、大学院に入ってから、アメリカ文学を勉強した。もともとアメリカ文学は好きで、高校時代からスタインベックやヘミングウェイとか色々読んでいたから、やるんだったら文学だなんて思っていた。だから、大学院は文学に変えたんだよ。そこで、『緋文字』に出会ってさっき言った話に続くって感じかな。

もし、英語学をやっていたら、今ここにいないかもしれないしね。アメリカ文学をここでやっているっていうのは、すべて人間関係の縁だから。だから英語学をやっていたら、もしかしたら高校の先生とかになっていたかもしれないね。いずれにしても、自分がやりたいことをやり通す正直で素直な気持ちが大事だと思うよ。

横田：もともと、学問の道に進みたいっていうのはあったのですか？

高橋：あ、それは大学に入ったときからあったね。

学問っていうか、勉強を続けていきたいというか。その頃は研究なんてよくわかってないから、今やっている勉強を、英米文学であれ何であれ、やっていきたいなっていうのはあった。結構早い時期からそう思ってたね。大学院に行こうっていうのは。

横田：それっていうのは、英文学が好きだからっていうのはもちろんあると思うんですけど、元々にある、研究心というか、探究心があったからっていうことですか。

高橋：まあ、そういう風にも言えるかもしれないけど、本を読むのは好きだったから、探究心とまでは言えないかもしれないけど、読み続けていければいいかなって思っていた。

高橋：話は変わり、お気に入りの1冊に関してですが、僕は今まで授業でも扱っているけど、サン・テグジュペリの『星の王子さま』(The Little Prince, 1943)をいつも推薦しています。これはもう皆さんよく知っているように、その中に有名なフレーズ“What is essential is invisible to the eye”(「最も大事なものは目に見えない」)という言葉がある。そのことが全体を通じて語られている作品だよ。僕は高校の時に初めて英語で

読んだけど、その時以来、自分にとって大事な一冊だね。

横田：僕もまだ小さかった時に絵本で読んだことがあります。

高橋：そうだね。色々な訳で出版されているけれど、やっぱり一番いいのは原書かな。勉強にもなるしいいと思うよ、大切なことが書かれているから。

横田：哲学的な内容ですか？

高橋：哲学的とも言えるけど、なんか詩的な幻想とも言える作品です。ストーリーは単純。王子様は愛していたバラを置いたまま、自分の住んでいた小さな星から旅に出て、7番目の星である地球に降り立つ。そこはサハラ砂漠でたまたまそこに不時着した飛行機乗りと出会う。その飛行機乗りは、自分の幼い頃の純粹無垢な気持ちを思い出させてくれるその子どもとの交流を通じて生きる上でとても大事なことを再確認してゆく。本の内容はまだ覚えているかな？

横田：砂漠のシーンはなんとなく覚えてますね。

高橋：読んでみるといいよ。最初はわかりにくいかもしれないけど、「最も大事なものは目に見えない」というテーマが中心になっているんだよね。

横田：授業でその話をしたことはないですか？

高橋：折に触れてしたことはあるよ。やっぱりお気に入りの1冊だからね。他にも色々読んでるけど、一番と言われたらこれかな。また、中学、高校の頃は太宰治や坂口安吾もよく読んでいたね。

横田：それも興味深いですね。

高橋：そうだね。全体的に文体とか表現が自分にフィットするんだよね。それに、檀一雄という作家がいるけど、彼の『太宰と安吾』って本も面白いよ。太宰治と坂口安吾を一友人の眼での確に描いている伝記的な本です。坂口安吾は知ってる？

横田：ああ、聞いたことないです。

高橋：同じ時代に活躍した無頼派の作家たちだよ。あと、もう一人挙げるとしたら吉本隆明という詩人で思想家の人の本も一時期よく読んでいた。戦後日本の思想界を牽引した人で、すごく影響力があった人です。彼の詩集は最近文庫で出版されて、初期から晩年まで網羅されている形を出ているんだ。簡単に言えないけど、やっぱり太宰と同じで彼の魅力を伝えるのは難しいね。でも、読んでみると面白いよ。

横田：ありがとうございます。少し質問が変わるのですが、英文学を学んでよかったことは何ですか？

高橋：そうだね、色んな物事を多角的に見る力を養え

たことかな。平衡感覚という言葉が好きだけど、英文学を通してバランス感覚を持って物事を判断する力が身についたと思う。特に文学は想像力を培うからね。それが人間の心の豊かさに繋がるのではないかな。やっぱり文学研究者はそうした部分を強く感じるはずだと思うんだ。やはり、生きていく上で想像力は大事で必要でしょ。一方的な駄目だしがヘイトスピーチに繋がってしまう可能性もあるよね。嫌いなら嫌い、好きなら好きだけで本当にそれでもいいのか、そこにクエスチョン・マークをつける。慌てない人間のこころのゆとり、そして物の見方が狭くならないようにすることが大事。「言うは易く行うは難し (Easier said than done)」だけど、見えているものがすべてだって思わないほうがいいんじゃないか。だから本を読む。読むという行為は孤独の世界に入ることだけど、その世界で色々な登場人物に出会う。そうすると、今度は色々な考え方があることに気づかされる。自分の頭の中で想像して、そうかこういう人もいるのか、こういう生き方もあるのだと確認する。そうしたところに文学の意味があると思うんだよね。

横田：そういった目を養うことが大事なのですね。

高橋：そうだね。文学作品はフィクションだけど、ノンフィクションもノンフィクションで面白い。だけど、フィクションという人間の頭の想像上で作ったものの中に、なにか人間が生きる上での真実が描かれていると思いますね。

横田：なるほど。実は自分自身、普段なかなか本を読もうとなることがあまりなくて…

高橋：卒論は何について書くのかな？

横田：英語教育について書こうと思っています。

高橋：英語教育は教育としてとても意味があると思うけど、生徒と接する時に蓄えとして文学的なものがベースにあるといいのではと思うんだよね。だから先に言ったイマジネーション、想像力を培い養うために物語や文学作品を読む。是非、そうしたことを実践してもらえばと私は願います。

横田：なるほど、少し謎が解けた気がします。







安否や体調を確認することもできます。はじめのうちは、引率者からのメールの確認や返信に時間がかかる学生も散見されましたが、現地での研修が始まる頃には、全員がすぐにこちらからの連絡に反応してくれるようになっていました。このほかにも、学生には出国前から次のような危機管理に関する取り組みをしてもらいました。

- A. 外務省の「海外安全ホームページ」上での現地情勢（医療事情なども含む）の確認
- B. 「たびレジ」（外務省海外安全情報無料配信サービス）や「Pro Finder」（保険会社の安否確認アプリ）への登録
- C. 法学部教務課（International Education Center）主催の「海外渡航・危機管理セミナー」への参加
- D. 緊急時の連絡手段等の確認、など

現地で大きなトラブルにも見舞われず、全員が無事に帰国することができたのも、決して「たまたま」ではなく、学生の危機管理に対する意識の高さによるものであったと思います。

②については、学生に「語学研修が成功したのは引率の先生がいたからだ」という思いを抱かせないように注意していました。研修の主体はあくまでも学生であり、学生には自身の力で研修を成功させたという経験をしてもらいたかったからです。そこで、現地到着後は、毎日の健康観察を兼ねたメッセージを送ることを除けば、こちらから積極的に学生と関わることは控えていました。それでも、学生と一緒に料理をして食べたり（私はフライドポテト担当。アイルランドのジャガイモは安価で絶品です）、現地のレストランでミーティングを開き、大いに経験を語り合ったりしたことは、私にとっても（同行した家族にとっても）何物にも代えがたい貴重な体験となりました。私にとっては、音楽とお花と文学にあふれたダブリンの街並みももちろん素敵でしたが、最高の光景は教科書片手に友人たちとキャンパス内を楽しそうに歩く学生の姿でした。

今回の語学研修を通して、学生の人生も大きく動き出したようです。学生の中には、帰国後、日本大学の交換留学や（海外の）大学院への進学を目指し始めた学生がいます。日本語講座のボランティアを始めた学生、ゼミナールで社会と言語の関係性について学び始めた学生もいます。先日法学部で開催した海外留学説明会には100名を超える学生が参加してくれました。これからも、ひとりの教員として、世界に羽ばたく学生を支援したいと思います。

最後になりましたが、本研修を支援してくださった関係の先生方、職員の皆様、DCUのスタッフの方々にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

## 《検定試験奨学制度》

### 自分のペース、自分の学習方法 を見つけることから

日本大学文理学部英文学科卒業生 瀬治山 凜音

2023年第3回実用英語技能検定準1級試験の合格に伴い、検定試験奨学制度を申請させていただきました。英検は英語学習を始めた中学生の頃から受験をしてきました。準1級は、4回目の受験で合格することができました。高校3年生の頃から1年に1回程のペースで受験をしてきました。英検受験の目的としては大学でも自身の英語力を可視化し確認したいという気持ちからでした。高校生までは学校のカリキュラムの一環で受験の機会がありましたが、大学では全ての選択が自分に委ねられています。英文学科に在籍するからには、英語力は伸ばし続けたいという思いがありました。合格までに3年もかかってしまいましたが、よく言えば3年間受験勉強に向き合うことができたと考えております。

大学生になると、TOEICの受験も主になってきます。正に、英文学科では2年生までTOEICの受験が義務付けられています。そんな中でも、TOEICではなく英検の受験を選択してきたのは合否がはっきり決まる結果が自分にあると実感していたからです。もちろんこの2つの試験目的は学術的な英語力、そしてビジネスシーンで使う英語力を測る、という違いがあります。自身の伸ばしたい英語力を軸に受験するのも1つの手ではありません。ご存知の通りTOEICは点数によって英語力を測りますが、英検は合否が決定します。TOEICも数回程ですが、受験経験があります。個人的な感覚になりますが、点数だけだと目標が曖昧になってしまいました。例えば、800点を目指していてその時750点を取ったら、目標点まで50点不足しています。私は「750点でも十分！頑張った！」と満足してしまっ、英語力を伸ばすことに妥協してしまうと思いました。そのため、私はTOEICではなく英検の受験にフォーカスしてきました。

次に英検の受験勉強についてです。準1級までの全ての級を受験してきましたが、比較すると準1級は特にインプットすべき単語の根気強い暗記が大切であると学びました。準1級の前のレベルの単語は何となく聞いたことがあるような単語も出題されていました。しかし、準1級の単語レベルは、日本語ですらも聞いたことのない学術的な単語が頻出しており、馴染みのないタイトルの長文問題がほとんどでした。





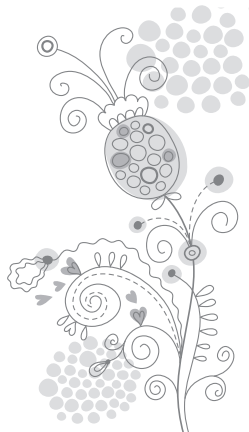




この流れに沿って読み進めることで、読者の視点もまた、アジア・パシフィックをめぐる劇場文化の広がりを実感できるようになっている。

劇「場」は本来、特定の「場」に位置し、演劇や映画、舞踏、芸能などをその「場」に集まった観客に見せることを前提としている。旅芸人一座の仮設舞台のように移動を前提とした劇場も存在するが、産業革命以前はその移動範囲も限られていた。しかし、産業革命後の印刷技術や輸送・移動技術の発展により、戯曲、役者、小道具（時には大道具）が海を越えて移動することが可能になった。本書は、こうした時代のなかで、19世紀末以降、海を越えて劇場に何がもたらされたのか、また劇場から海の向こうに何が発信されたのかを明らかにする一連のケーススタディとなっている。

なお、本書の執筆が進められた時期に、新型コロナウイルスの影響で移動が大きく制限された。たとえば私が担当した第8章「浅草」は、西洋から見た浅草の見世物について探究するものであるが、主に日本国内で入手可能な資料に頼らざるをえなかった。このような制約のなかで研究を継続できたのは、監修者の藤岡氏をはじめとする共著者の皆様の支えがあったからである。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。



## 《研究室だより》

### ●2024年度（令和6年度）行事

#### ◆第50回英語弁論大会（文理学部主催）

11月3日（日）文理学部1号館3階137A教室において、第50回文理学部英語弁論大会が開催されました。結果は以下のとおりです。

- 1位 伏屋 少耶子（社会学科2年）
- 2位 池下 海舟（英文学科4年）
- 3位 本橋 智征（社会福祉学科2年）

※学年は当時のもの

#### ◆大学院特別講義

令和6年度の大学院特別講義は以下のとおり行なわれました。

#### 【米文学分野】

- 日 時 9月26日（木）4・5時限目
- 講 師 Martin F. Manalansan IV先生（ラトガース大学教授）

[講義題目] Eating America: Food in Literature and Culture

#### 【英語学分野】（英語教育）

- 日 時 10月21日（月）4時限目、  
10月28日（月）4時限目
- 講 師 日臺滋之先生（元玉川大学教授・拓殖大学大学院非常勤講師）

[講義題目] ①授業実践を通して語彙の習得をどう進めていくか  
②検定教科書支援教材としての学習者コーパスの活用

#### 【英文学分野】

- 日 時 11月13日（水）4・5時限目
  - 講 師 松本三枝子先生（愛知県立大学名誉教授）
- [講義題目] Elizabeth Gaskellの小説と19世紀イギリスの社会・文化状況

#### ◆卒業式・修了式

3月25日（火）午前11時より、日本武道館にて卒業式が挙行されました。また、同日13時30分より、文理学部3号館3307教室にて、学位記伝達式が行われました。本年度は学部卒業生124名、大学院博士前期課程修了者2名、大学院博士後期課程修了者1名でした（3月25日付）。

優等賞は福部心音さん、学部長賞は濱本彩由さんでした。

◆卒業論文・修士論文

令和6年度に提出された卒業論文の分野・作家の内訳および修士論文のタイトルは以下のとおりです。

〈卒業論文 分野・作家内訳一覧〉

(カッコ内の数字は人数)

【英文学】(47)

Austen, Jane (3)  
 Bronte, Charlotte (1)  
 Carroll, Lewis (2)  
 Chaucer, Geoffrey (8)  
 Dickens, Charles (3)  
 Doyle, Conan (1)  
 Hardy, Thomas (2)  
 Ishiguro, Kazuo (5)  
 James, Henry (1)  
 Orwell, George (1)  
 Shakespeare, William (11)  
 Shelly, Mary (3)  
 Stevenson, Robert Louis (2)  
 Wilde, Oscar (3)  
 Woolf, Virginia (1)

【米文学】(15)

Capote, Truman (3)  
 Dreiser, Theodore (1)  
 Fitzgerald, Francis Scott (2)  
 Hemingway, Ernest (1)  
 Morrison, Toni (2)  
 Salinger, J.D. (2)  
 Stowe, Harriet Beecher (1)  
 Twain, Mark (1)  
 Walker, Alice (1)  
 Williams, Tennessee (1)

【英語学】(60)

意味論 (7)  
 統語論 (2)  
 英語史 (6)  
 コーパス言語学 (8)  
 現代英文法・語法 (16)  
 方言 (1)  
 英語教育 (20)

【その他】(6)

【映画監督】

Cameron, James (2)  
 Frankel, David (1)  
 Marshall, Rob (1)  
 Miller, Bennett (1)

【バンド】

Soundgarden (1)

〈修士論文 タイトル一覧〉

丸山萌菜美 Romanticisms in *The Great Gatsby*:  
 Images, Commodities, and the Critique of  
 Capitalist Dreams  
 川鍋 理奈 On *be going to* in Apodosis

〈博士論文 タイトル一覧〉

岡 麟太郎 A Semantic and Pragmatic Study of Seven  
 English Future Expressions from the  
 Perspective of the Speaker's Certainty  
 towards Future Events



## ● 2025 年度（令和 7 年度）行事

### ◆ 入学式・開講式

4月2日（水）午後1時より文理学部にて開講式が行なわれました。また、入学式が4月8日（火）午前9時より日本武道館にて行なわれました。英文学科・英文学専攻への入学者数は次のとおりです。

学部入学者	139名
大学院博士前期課程入学者	3名
大学院博士後期課程入学者	1名

### ◆ 在籍者数

学部	2年生	149名
	3年生	146名
	4年生	171名
大学院博士前期課程		8名
博士後期課程		3名

### ◆ 第 51 回英語弁論大会（文理学部主催）

令和 7 年 11 月 1 日（土）午前 11 時より、文理学部（教室等未定）にて、第 51 回文理学部英語弁論大会が実施予定です。

### ◆ 大学院特別講義のお知らせ

英文学、米文学、英語学の各分野の著名な先生方による大学院特別講義が、令和 7 年度も行なわれる予定です。詳細は英文学科ホームページでお知らせします。

## 着任のご挨拶

日本大学文理学部准教授 高橋 洋平

こんにちは、令和 7 年度に着任しました高橋洋平と申します。この度ご縁があり文理学部英文学科の専任教員として教育研究に携わることとなりました。まず、着任前から今日に至るまで（決して若くもなければ可愛げもない）新任教員の粗相を寛大なお心でお許し頂いた上、細部に至る温かなご支援を下さる英文学科の教職員の皆さまにこの場を借りて心よりお礼申し上げます次第です。

さて、今回のエッセイ執筆に際して、その取っ掛かりとして自身の教育・研究歴を簡単に振り返りました。学位を取得した年度に初めて教壇に立ち、その後複数の大学での非常勤講師を経て、教養科目専任教員として宮崎県と千葉県私立大学でこれまで奉職をしましたが、令和 7 年で大学教員としてちょうど 10 年目を迎えたようです。世間一般的に就職が遅いとされる本業界ですが、「10 年選手」なんて言葉もあるように、一つの区切りを無事迎えられたことを、両親、家族、友人、そして公私共に大変お世話になっている外池滋生先生（元青山学院大学教授、現ハワイ大学研究員）と江頭浩樹先生（大妻女子大学教授）に改めて感謝申し上げます次第です。

一方、「10 年」という節目を迎えて、職務への向き合い方について見直す時期が来たと感じています。これまでは、所属組織の諸先輩方が苦心の上構築した既存の教育研究基盤を深化発展できるよう尽力して参りましたが、これからは自身をハブ化して、大学そして社会への価値産出を意識しなければなりません。まずは、目の届く範囲、手の届く範囲での活動になるかもしれませんが、皆さまのお力をお借りできればと存じます。

次に研究活動について。私は自然言語の統語論を専門としています。特に近年は生成文法を背景としながらミニマリストプログラムと呼ばれる枠組みで自然言語の文構造について研究しています。ミニマリストプログラムを専門とする多くの研究者の間で共有されている研究課題は、「従来の理論で提唱されてきた様々な説明装置を一般科学に課せられる経済性や効率性といった諸原理にどこまで還元できるか」というものです。言語機能の中には語と語を結合する操作である併合（Merge）のみが存在し、併合によって形成された言語体の音声形態と意味が適切に解釈されるためには、併合にどのような制約が最低限課されるのかを解明することを目指しています。このような状況を背景とし、ここ数年の個人の研究課題として併合のプロト操作であるセット形成（Form Set）の構造構築可能性に



## 発 表

1. 初期近代英語の進行形の意味的発達と語用論的強化  
田中 智己(文理学部講師)
2. Be + 現在分詞の変遷：現在分詞語尾の形態を中心に  
秋葉 倫史(スポーツ科学部准教授)
3. レジスターの違いで見える進行相、完了相の発達  
塚本 聡(文理学部教授)

## 11月 研究発表(2024年11月30日)

司 会 小澤 賢司(通信教育部准教授)

## 発 表

1. EFL学習者に対する「読み聞かせ」がリーディングの流暢さに与える効果に関する実践研究  
島本 慎一郎(文理学部講師)
2. 『ユリシーズ』(1922)におけるダブル・オープニング再考—各挿話論か複数の挿話論か—  
猪野 恵也(通信教育部准教授)

## 12月 2024年度学術研究発表会・総会(2024年12月14日)

## 【学術研究発表会(文学の部)】

司 会 野村 宗央(松山大学特任准教授)

## 発 表

1. Heaven and Hell—Perkins, Milton and Overton  
川崎 和基(工学部准教授)
2. 現代アメリカ演劇から見るアメリカ  
松本 美千代(国際関係学部教授)

## 【学術研究発表会(語学の部)】

司 会 佐藤 健児(法学部専任講師)

## 発 表

作文学習における訂正フィードバックの効果：  
文法エラーの属性による効果の影響  
隅田 朗彦(文理学部教授)

## [最終講義]

If節における認識的willについて(再び)  
吉良 文孝(文理学部教授)

## ● 2025・2026年度運営委員

会 長 一條 祐哉

副会長 松山 博樹

- |             |          |
|-------------|----------|
| ○秋葉 倫史      | ○杉本 宏昭   |
| 秋山 孝信       | ○鈴木 孝    |
| 新井 英夫       | 武中誠二郎    |
| ○飯田啓治朗(会計)  | ○田中 竹史   |
| ○一條 祐哉      | M.K.チルトン |
| 猪野 恵也       | 塚本 聡     |
| 今井 真吾       | 堤 裕美子    |
| 今滝 暢子(会計監査) | ○堀切 大史   |
| ○小澤 賢司      | ○前島 洋平   |
| 加藤 寛典       | ○牧野 理英   |
| 上滝 圭介       | 松浦 恵美    |
| 川崎 和基       | ○松山 博樹   |
| ○閑田 朋子      | 松崎 祐介    |
| 久井田直之       | ○柳川 浩三   |
| ○黒滝真理子      | 山岡 洋     |

(○印は常任委員)

[任期は2025年4月より2027年3月まで]



●日本大学英文学会 2023 年度決算額

2023 年度決算額	
前年度からの繰越金	¥2,944,813
収入の部	
会費	¥500,500
研究会員	¥424,000
同窓会員	¥64,000
学生会員（新入生）	¥12,500
雑収入	¥12
補助金	¥17,828
収入合計	¥518,340
支出の部	
論叢出版費	¥321,850
会員名簿出版費	¥69,850
学会通信出版費	¥43,230
通信費	¥59,456
大会費	¥5,772
大会懇親会補填費	¥0
講演謝礼費	¥0
大会	¥0
月例会	¥0
講演会	¥0
他学会年会費	¥31,967
日本英文学会	¥8,262
日本アメリカ文学会	¥9,262
日本英語学会	¥7,181
英語教育関連学会	¥7,262
用品費	¥0
会合費	¥24,399
交通費	¥2,665
月例会雑費	¥7,534
ホームカミングデー費	¥0
事務運営費	¥330
奨学制度関連費	¥6,000
査読料	¥0
予備費	¥0
支出合計	¥652,143
日本大学英文学会 基金への繰入	¥0
日本大学英文学会 基金への繰入後の合計	¥321,905
次年度への繰越金	¥2,811,010

●お知らせ

◆月例会予定

2025 年 10 月以降の月例会の予定は以下のとおりです。なお、予定は変更となることもございます。

詳細につきましては、メールおよび本学会ホームページにてご案内いたします。

- 10 月 英語教育シンポジウム（2025 年 10 月 18 日）
- 11 月 研究発表（2025 年 11 月 22 日）
- 12 月 2025 年度学術研究発表会・総会（2025 年 12 月 20 日）

◆研究発表者募集

当学会では、月例会・年次大会の発表者を募集しております。発表をご希望の方は、以下の情報を事務局までお寄せください。なお、検討の結果、ご希望に添えない場合がございます。

1. 氏名
2. 住所・電話番号・メールアドレス
3. 所属
4. 発表希望年月
5. 発表題目
6. 要旨（日本語 400 字以内、英語 200 語以内）

◆『英文学論叢』第 74 巻 原稿募集

日本大学英文学会機関誌『英文学論叢』第 74 巻 英文学科創設 100 周年記念論文集（仮）（2026 年秋発行予定）の原稿を募集いたします。投稿をご希望の方は、『英文学論叢』第 73 巻（2025 年 3 月発行）巻末の投稿規定に沿って、奮ってご投稿下さい。締切日は 2026 年 1 月 31 日（必着）です。

◆会員情報の登録・変更について

会員各位の情報更新をメールにて受け付けております。メールアドレス、住所、その他の会員情報の登録・変更をご希望の方は、事務局までお知らせください。

◆会費納入のお願い

2024 年度の年会費（研究会費 4,000 円、同窓会員 1,000 円）を未納の方は、郵便振込で納入いただきますようお願いいたします。2025 年度の年会費につきましては、2025 年 11 月発行予定の「英文学通信」第 124 号送付時に振込用紙を同封いたします。

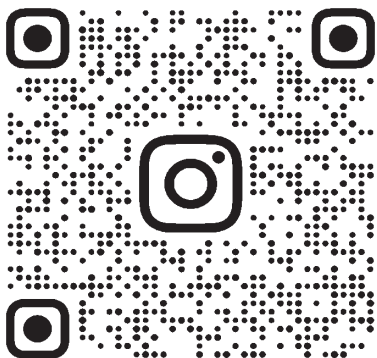
口座番号：00140-3-27474  
加入者名：日本大学英文学会

**◆日本大学英文学会公式Instagramの開設について**

日本大学英文学会の公式Instagramを開設いたしました。

本学会のイベント（月例会、特別講演など）や刊行物（『英文学会通信』『英文学論叢』など）の案内をはじめとして、さまざまな情報を配信いたします。

以下のQRコードから、もしくはInstagram上で「日本大学英文学会」または「esanu02」で検索の上、フォローをお願いいたします。

**ESANU02****●学生編集委員**

英文学科4年	秋元優志
英文学科卒業生	小澤優月
英文学科卒業生	塩澤拓幸
英文学科卒業生	鈴木大翼
英文学科卒業生	高橋尚吾
英文学科卒業生	田原希優
英文学科卒業生	樋口康平
英文学科4年	横田 涼

